令和六年度

首都圏入学試験問題

国語

令和五年十二月十七日（日）

「はじめ」の合図があるまで、この問題用紙の中を開いてはいけません。

注意事こう

一、問題用紙は2ページから14ページまでです。

二、かんとく者の指示にしたがい、必要事こうを記入しなさい。

三、解答は解答用紙にはっきりと記入し、解答らんからはみ出してはいけません。

四、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。それ以外のことがらについてたずねたいことがあれば、手をあげてかんとく者に聞きなさい。

五、かんとく者の「はじめ」の合図で始め、「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

一

次の各文の――部について、1～5のカタカナは漢字に直し、6～10は読み方をひらがなで書きなさい。

1 ジッセキがあると自信もつく。
2 大都市にビルがリンリツする。
3 学校までトホで十キロメートルだった。
4 人生に対するココロザシを持つことは重要だ。
5 心のキズを隠すためにわざと笑った。
6 今回のレポートは細大漏らさずまとまっている。
7 東北縦断自動車道。
8 先ほど伝令が入りました。
9 人数が足りないので手伝いに来てください。
10 先生の裁きに皆が賛成を口にした。

二

次の文章について、例にならって、対義語の熟語を漢字で書きなさい。ただし、CにはAの、DにはBの対義語が入ります。

例

A個人ではB無料でしたが、C□だとD□です。

解答　C団体　D有料

1

研究チームのA解散時はもはやB安心できましたが、C□時はD□でした。

2

A公用ではB許可されていますが、C□ではD□されている機器だったのです。

3

A部分的にはB退化している個体もありましたが、C□ではD□しています。

4

だれもがA義務の達成にB消極的でしたが、C□の主張にはD□的なようです。

5

大方の研究は成功裏に終わりました。その後、交流がA断絶したことについては確かにB悲観的でしたが、研究が今後もC□する可能性についてはD□的です。

三

次の各文章を、それぞれ例にならって、敬語表現に直し、空らんA・Bに当てはまる語句を書きなさい。

例

わたしも する から、お前たちも しろ。

↓ わたくしも [いたし] ますので、あなた方も [なさって] ください。

1

わたしも いる から、お前たちも いろ。

↓ わたくしも [A] ますので、あなた方も [B] ください。

2

わたしも 言う から、お前たちも 言え。

↓ わたくしも [A] ますので、あなた方も [B] ください。

3

わたしも 食べる から、お前たちも 食べろ。

↓ わたくしも [A] ますので、あなた方も [B] ください。

4

わたしも 見る から、お前たちも 見ろ。

↓ わたくしも [A] ますので、あなた方も [B] ください。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人は現在、個人の確立や個性の尊重を重要なこととして認識している。しかし、それは西洋の個人主義をよく理解していないので、欧米人から見ると日本特有のへんてこな「①コジンシュギ」になっている。

社会や他人と自分との関係を重視しない、自分勝手主義になっているのだ。そして、それに気づいた日本人のなかには、だから「西洋の個人主義は駄目だ」などと②見当違いのことを言う人もある。

私が最近、編集・出版した『「個人」の探求　日本文化のなかで』（NHK出版）で、オーストラリアの社会学者で、日本語を巧みに話す知日家のポーリン・ケントさんが、「日本人のコジンシュギ」について論じていて、それが現代のわれわれ日本人にとって非常に大切なことと思うので、ここに紹介しておきたい。

ケントさんの論の特徴は、最近の日本の若者は「自己チュー」でけしからん、などというのではなく、このような若者が育ってくる要因として、日本の家庭や家族の在り方がいかに関係してくるかを具体的に納得のゆく形で示しているところにある。

まず、ケントさんは、日本人の「個室」の使い方が③欧米とはまったく異なることを指摘する。欧米でも、一定の年齢に達した子どもに部屋を与えるのは事実だ。しかし、それは「寝室」であって「個室」ではないのだ。寝るときや着替えるとき以外は、子どもはだいたい家族と一緒に、居間かキッチン、ダイニングにいるのが普通である。

「親子の口論も、キョウダイ（兄弟姉妹）のけんかも居間やその他の共有スペースで起こる。だから家族という小さな集団のなかで、人と人がともに生活することのむずかしさと素晴らしさを学ぶことができる」

とケントさんは言う。

「子どもがドアを閉めて寝室にこもっていれば、親は異常事態だと受け止め、当然すぐにノックして子どもと話し合うために入ろうとする。ところが、日本の親は部屋にこもった子供を放っておくのが【　ア　】の尊重だと考えているふうだ」

こんなふうに引用し始めると、すべて引用したい誘惑にかられるほどだが、ケントさんの指摘は実に的確である。個人を育てるためにつくられたはずの「個室」が、日本では④個

人主義を成し遂げるために必要な対人関係の訓練から逃避する場になってしまっているのだ。

次に家族の在り方である。家族一同が食事をし、そこで会話を楽しむとともに食事のマナーについて学び、あるいは、ものごとについての考え方や、対処の仕方などを学んで「個人」として成長してゆくべきであるのに、日本の現在はどうであろう。家族がバラバラに食事をするところが多くなっている。

それに、家庭内のすべてのことに画一化、商品化がすすみ、家族一同が、妙に「平等」になってしまっている。これでは、だれが責任を持って、子どもが「個人」としての大人に育ってゆくのに必要な教育をするのだろう。

日本の親は子どもの「勉強」だけにこだわり、「個人」としての訓練をおこたっている。近ごろの若者のことを嘆く以前に、日本人の大人が自分の生活を振り返り、コジンシュギ生産に加担していないかを検討する必要があるようだ。

（河合隼雄『ココロの止まり木』所収「コジンシュギ」）

問1 ——部①とありますが、カタカナで表記されているのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問2 ——部②とありますが、筆者はなぜ「見当違い」だと考えているのですか。わかりやすく説明しなさい。

問3 ——部③とありますが、なぜそのように言えるのかを説明した次の文の〔 ア 〕〔 イ 〕にあてはまる語句をあとの1～4からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

欧米では個室は、主に寝ることや着がえることといった〔 ア 〕に使用され、キッチンやダイニングは、家族との交流を通して〔 イ 〕に必要な対人訓練を行う場所としての働きを持っているから。

1 個人主義　　2 家族の在り方

3 個人的な事柄　　4 生活のむずかしさ

問4　【　ア　】にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　プライバシー
2　パーソナリティー
3　ビジネス
4　エコノミー

問5　――部④とありますが、この訓練として適当でないものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　兄弟げんか
2　会話を楽しむこと
3　家庭内の平等化
4　家族の中の責任の確認

問6　文章全体から、日本においては、家族全体の決定と責任をはっきりさせ、部屋にこもる家族を食事に誘い、会社や学校での体験交流の場を作る必要があると思われますが、筆者はこのことをどのようにまとめていますか。当てはまる部分を本文中から五十字で抜き出しなさい。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

巧は、カバンから入部届を取り出して、真紀子の前に置いた。

「なに？」

「入部届。保護者のとこ名前書いて、ハンコおしといて」

「まあ。巧、まだクラブに入ってなかったの？」

真紀子が声を高くする。おどろいているのだ。

「あんたのことだから、すぐにでも野球部に入るのかと思ってた」

巧は、①苦笑する。この一週間、四時前には家に帰っていた。むろん、すぐ着がえて、豪との練習に出て行ってはいたけれど、少し注意すれば、部活に参加していたかどうかぐらい気がつかないわけはない。真紀子はいつもこうだった。興味のないことには、注意を向けない。自分に興味がないのか、野球に興味がないのか。巧は、時々考える。おそらく、両方だろうと自分で答える。

それならそれでいい。巧自身、母に興味があるわけではなかった。

「月曜日に出すから、夜までに書いといて」

巧は立ち上がった。もう二時を過ぎている。豪が待っていると思うと、気がせいた。

「巧、ちょっと待ちなさい。なによ、その態度。それが、ものを頼む態度なの」

巧は、母と向かい合ったまま黙っていた。②時計の音が聞こえる。

「親子でもね、ものを頼むときの言葉とか口調ってあるのよ。ぽんと紙を放り出して、書いといてはないでしょう。あんた、どうして、いつも人に命令するの」

「命令なんかしてない」

「じゃ、それで頼んでるつもり？」

頼んだつもりもなかった。自分の入部届だ。それに保護者の直筆の名前と印がいる。それだけのことだ。母に頭を下げるようなことではない。

「母さん、おれが野球部に入るって決めたんだ」

「わかってるわよ、そんなこと。私がすすめるわけないでしょ」

「おれが決めたことをおれがやるのに、母さんに頼む必要はないだろ」

真紀子のほおがぴくっと動く。巧の目にもはっきり見えた。

「どうしてそんな考え方しかできないの。親の了解がいるから入部届があるんでしょ。それなら、ちゃんと了解してくれって頼むのが、すじじゃないの」
洋三が、軽くせきをした。
「真紀子、いいかげんにしとけ。たかが入部届ひとつに、なんでそんなにいらつく」
「お父さんは黙ってて。巧は、いつもこうなのよ。ひとりでなんでも決めて当たり前みたいな顔して。自分が決めたことに人が従うのが当たり前みたいな考え、いつまでも通用しないわよ。【　ア　】、わたしが野球部に入るの反対って言ったらどうするの」
「母さんの反対なんて、関係ないよ」
巧は、手の甲でゆっくり口のまわりをぬぐった。時計を見る。二時十五分。豪が待っている。ひとりでランニングを始めたかもしれない。真紀子のほおがゆるんで、かすかな笑い顔になった。
「関係ない？　そうね、そう言うと思ったわ。【　イ　】、泥だらけになったユニフォームを洗うのはだれ？　試合のとき、お弁当作るのはだれ？　ボールやグラブやバットを買うのはだれなのよ。巧、あんたが野球するのは勝手よ。だけど、まわりの人間に支えられているって気持ち、少しはあってもいいんじゃないの」
【　ウ　】頼めというのか。野球部に入りたいから認めてくださいと、頭を下げろというのか。巧はこぶしをにぎりしめた。
母の言うことがまちがっているとは思わない。少年野球のチームにいたときも、泥の染みこんだユニフォームを、母は丹念に何度も洗ってくれた。早朝の試合のときも、必ず弁当を作ってくれた。1の背番号をきっちりと真っ直ぐに縫いつけてくれた。わかっている。
「母さんに、また迷惑かけるかもしれないけど、おれ野球をやりたいんだ。よろしく頼みます」
その一言でいいのだ。ちょっとおどけたしぐさで、頭ひとつ下げればすむことだ。それもわかっている。なのに、巧は立ったままこぶしをにぎりしめていた。テーブルの上の入部届が目に染みる。
（なんであんなものが必要なんだ）
ふいに、そう思った。野球がしたいのだ。あの白い小さなボールを投げて、打って、走ってみたい。その思いをとげるために、なんであんな紙がいるのだろう。親の了解なんてこ

とが必要なのだろう。自分の名前だけなら自分で書ける。なんで、それだけではだめなんだろう。中学の野球部に入る。ただそれだけのことが、どうして自分ひとりの力で決められないのだろう。

③「母さん、兄ちゃん、おじいちゃん、みんな見て」

青波が、飛びこんでくる。両手があわだらけだった。

「なあ、見て、見て」

親指と人さし指で輪を作り、青波はゆっくり息を吐いた。シャボンの玉が息に合わせてふくらんでくる。青波の手が横に動く。魔法のように、テニスボールほどのシャボン玉が宙にういた。

せっけん水の膜にさまざまな色を映して、巧の鼻のあたりに近づいてくる。思わず手が出た。指でシャボン玉をつつく。音もせずに玉は割れて、目の前から消えた。顔にせっけん水が散る。わっと声が出た。青波が笑う。真紀子も笑った。空気がゆらいで、柔らかくなった。巧は息をつく。

「着がえて、公園に行ってくる」

「そう、あんまり暗くならないうちに帰るのよ」

真紀子の声はおだやかだった。巧は台所のドアを閉めて、もう一度息をついた。

「真紀子」

巧が閉めたドアにちらっと目をやって、洋三が名前を呼んだ。

「おまえ、言いすぎじゃぞ」

「わかってるわよ。自分でも言いすぎてるってわかってるの。なんだか、巧には言いすぎちゃうのよ。だめだって、もうやめなきゃいけないってわかってるのにね」

「まったく、むちゃくちゃな親じゃ。巧も苦労する」

「わたしばっかり悪いみたいな言いかたしないで」

真紀子は、イスに座ってため息をついた。

「わたしね、心配してるのよ。ね、お父さん——」

目の奥が熱い。涙がうかんでくる。父の前で涙を見せるのは久々のことだった。

「あの子、中学でちゃんとやっていけると思う？」

「ちゃんとって、どういう意味じゃ？」

「あの性格よ。今だって、ひとこと『頼むよ』って言えばすむことでしょ。それが言えないの。人に頼んだり、あやまったり、妥協したりってこと、全然できないのよ。あれで、中学生活なんてやっていける？

それでなくても、いじめとかなんとか問題多いのに。巧み

たいに変わった子、きっとつぶされちゃうわ」
「巧が……つぶされる？」
洋三は、頭を後ろにそらせて笑った。
「あいつが、他人につぶされるようなたまか」
「お父さんは、巧びいきだから。わたし真剣に悩んでるのよ。なんとかしなくちゃって、あせってるの。小さいころから我の強い子だったけど、なんか野球はじめて、ボールが速くなるのに比例して、どんどん性格も強くなっちゃったみたい。自分に自信があるってことと、他人に協調しないってことは、ちがうでしょ。そこんとこ、教えとかないと……なによ、なにがおかしいの、お父さん」
洋三は、笑っていた口元をあわてておさえた。
「いやいや、感心したんじゃ。おまえは巧にあんまりかまわんから、あの子のこと、なにも見てないのかと思うとったけどな。うん、④ボールのスピードと性格の関係なんぞ、なかなか深い見方じゃ。それほど本気で心配しとるんなら、ごちゃごちゃ言わんと、『巧、お母さんは、あんたのこと心配なのよ』って、素直に言うたればええのに」
洋三が、真紀子の声音をまねる。青波が、カレーをほおばったまま笑い声を上げた。

「お父さん、ふざけないで。ちゃんと考えてよ。いくら野球がすごくたって、ボールが速くたって、それだけじゃだめでしょ。人間関係がうまくいかなければ野球だってできないんだし、結局、つぶれちゃうなんてことになったら……」
「兄ちゃん、だれにも負けないよ」
真紀子と洋三は、同時に青波の顔を見た。
「豪ちゃんが言うたもん。おまえの兄貴は、絶対だれにも負けないって。ぼくもそう思うんじゃ」
「豪くんがそう言ったの？　いつ？」
青波は、視線を空にうかせて、しばらく考えていた。
「あのね、ぼくが四年生になってすぐ。豪ちゃんに、真晴くんたちとボールの投げかた教えてもろうたの。そのとき、ぼくが、中学に行ったら兄ちゃんよりすごい球投げる人おるかなって、きいたんじゃ。そしたら、豪ちゃん、おらん言うて……うん、ほいでぼくが、兄ちゃんの球打つ人おるかなって言うたらな、また、おらんて言うた。おまえの兄貴は絶対だれにも負けんぞって」
洋三が、真紀子に左目をつぶってみせた。
「はは、おもろいことになったぞ。母親はつぶされるて心配しよるし、相棒のキャッチャーは、だれにも負けんて言いよ

る。どっちが正解かのう」
「お父さん、なんか楽しんでるみたいね」
「そりゃ、そうじゃ。巧や青波みたいなおもしろい孫がそばにおるんじゃ。楽しまにゃあ損、損。さ、わしは、風呂の薪割りでもしようかのう。青波、手伝え」
「うん、手伝う。でもマサくんたちがきたら、やめるよ」
洋三の腕にぶら下がるようにして、青波も出ていく。
ひとりになった台所で、真紀子は入部届の紙を見つめていた。生徒名の欄は、すでに巧が自分の名前を書きこんでいた。硬筆の手本のような、かたく整った文字だった。
(小さいころから、字の上手な子だった。ひらがなもカタカナもわたしが、手をとって教えたんだわ)
——巧が6Bの鉛筆をにぎって、字の練習をしている。
「タクちゃん、じょうず。あ、でも、そこちがうよ」
後ろから、真紀子は手をのばし、巧の右手にそえた。そして、いっしょに字を書く。頭を母の胸にもたせかけて、巧が笑う——。
(もうずいぶん、むかしのことなんだわ)
そう思ってから、いや、まだ十年もたっていないと気づく。一本の鉛筆さえ大きく見えた手は、十年たらずの間に、母親よりはるかに長い指と、広い手のひらに変わっていた。さわったりしたら、振り払われるだけだ。
「楽しまにゃあ損、損」
⑤洋三の言葉を小さくつぶやいてみる。【　エ　】、入部届に夫の名前を書きこんだ。

(あさのあつこ『バッテリーII』)

注　妥協——対立した事柄について、双方が譲り合って一致点を見いだし、おだやかに解決すること。
硬筆——毛の筆に対し，ペン・鉛筆などのように先のかたい筆記用具。

問1 ――部①とありますが、巧が苦笑したのはなぜですか。次の中から選び、番号で答えなさい。

1 母親に自分が部活の時間に家にいることからまだ部活動もしておらずさぼっていることを注意され、馬鹿にされていると思って腹が立ったから。

2 自分が部活の時間に家にいることを母親ならば必ず知っていなければならないのに、興味を持たれていない苛立ちを紛らわせようとしたから。

3 母親に自分が部活の時間に家にいることからまだ部活動が始まっていないことは少し考えればわかるのに、その程度の関心も持たれていないのだと思ったから。

4 自分に興味を持たれていない残念さは仕方ないが、母親に自分が部活の時間に家にいることくらいはさりげなく知ってもらいたいと思ったから。

問2 ――部②とありますが、これによってどのようなことを表現しようとしているのですか。八十字以内で、答えなさい。

問3 ――部③とありますが、青波は何をしているのですか。またそれは、この現場にどんな効果をもたらしていますか。説明しなさい。

問4 【ア】から【エ】について、あてはまるものとして最も適当なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 それから　2 だから　3 もし　4 けど

問5 ――部④とありますが、その関係は、真紀子の巧に対するどのような心配を表していますか。具体的に説明しなさい。

問6 ――部⑤とありますが、真紀子がこの行動をとった理由を答えなさい。

問7 真紀子が巧の成長を実感するものとして、具体的に思い出しているものは何ですか。文中から二字で抜き出して答えなさい。

六

次の1～5の和歌・俳句の鑑賞文として最も適したものを、あとのA～Eからそれぞれ選んで記号で答えなさい。

1　大空の　月の光し　寒ければ
　　影見し水ぞ　先づ凍りける

2　梅の花　降り覆ふ雪を　包み持ち
　　君に見せむと　取れば消につつ

3　名月を　取ってくれろと　泣く子かな

4　夏河を　越す嬉しさよ　手に草履

5　菜の花や　月は東に　日は西に

A　地肌に感じるひんやりした心地よい感触の楽しさを思い起こさせてくれる作品。江戸時代の俳人与謝蕪村の句。

B　対句をうまく使って、春の一日の終わりの美しい風景をとらえた作品。江戸時代の俳人与謝蕪村の句。

C　「大切な人」への優しく温かいものを感じさせてくれる作品。奈良時代の万葉集の読み人知らずの歌。

D　子供の目線のおもしろさと、我が子への愛おしさがうたわれた作品。江戸の俳人小林一茶の句。

E　空の美しさを地面にある水でたとえた作品。平安時代の古今和歌集をもとに詠まれた歌。